

「異文化交流の意義と課題」  
～海外留学のすすめ～

茂呂直彦

## はじめに

今日、世界は急速に進むグローバル化によって徐々に地球村に近づこうとしている。いや、決して遠くはない。それは、普く全ての人々により国家単位だけに捉われることのない寛容な態度と柔軟な意志を備えることの必要性が高まってきたということに他ならない。グローバル化している現代では、異文化体験のフィールドがこれまでよりも増えたと言っていい。つまり、違った文化に触れあうことによって、お互いに刺激を与え合うチャンスが社会の様々なフィールドに転がっている。筆者は特に学术交流の場でもある大学という単位が最重要出発点という位置付けの基に実践することを理想とする。この今を生きる我々がこの異文化に対して無意識であってはいけない。無意識であっては、必ず歪が生まれてしまう。だから、もう一度異文化というものを考えなくてはいけない時代になっているといえよう。そもそも異文化とは次のように定義される。「その社会と、言語を始め思考様式・風俗習慣など、種種の面で違いの認められる、他の社会の文化<sup>(1)</sup>」。ここで一歩立ち止まって考えてみると、意外なことに気づく。多くの人々が異文化とは、自分の国と留学生の出身地である何処の国といった国家単位の意識で文化の違いを分別したいたのではないだろうか。しかしながら、現代ではものの情報化・高度化・多様化によって、日本国内にいても様々な文化に遭遇するのが稀ではなくなった。文化をもっと細かく見れば、文化を形成する人間ひとりひとりの特徴や個性にも目を向けることになる。外国人に限らず、一人一人の人間を見ていけば、言語はともかく生活スタイルも考え方も、一人ひとり好みによって異にして不思議ではない。従来意識にあった遠い外国から来た文化を吸収するといった気持ちも大事である。しかし、さらに大事なのはお互いが異文化理解を通して、同一社会を生きる「人と人」としての違いを尊重した関係をつくっていくこと。それと同様に、同一社会に生きる既存の多文化をどう共生させて心豊かな交流を続けて行けるかを真剣に考えることが大切なのではないか。価値観の多様化が顕著ないま、個人が新たなフィールドに足を踏み入れた時に、自分にはない文化がきっとそこにはあるだろう。そのフィールドには、個人にとっての海外であっても国内であっても遭遇しうる異文化が必ずある。だからこそ、それを取り入れていく姿勢、これを鑑みてより善い関係を築き上げようとする姿勢、異文化交流にとってこれに勝る重要なものはないのではないだろうか。筆者はこのような考えから、中国留学での自らの体験を踏まえつつ、そして最も身近で外国人割合の大多数を占める中国及び中国人との関係を異文化理解の糸口にして、国内外の多種多様な異文化の人々とより良い円滑な関係を構築することを目的とし、身近な交流を基礎とし

た海外留学への重要性を中心に添えた異文化交流の発展を考えていきたい。

## 本論

### 1. 中国文化の特質

#### 伝統的な記念日

まず先に異文化の対象を中国に当てる。「中国(中華人民共和国)」建国の年である1949年以来、毛沢東率いる共産党一党独裁による社会主義としての中国は、これまで確実に自己の文化を継承させてきた。建国60周年祈念をむかえ、それを祝う国民の盛り上がりの華やかさは、自国に対する誇り・希望といった意識が高いことを物語っている。街全体から国家全体までが国家への誇りと希望の思いで満ち、爆竹が鳴り、祝いの垂れ幕が下りる。それは中国国民がきちんと中国を国家という枠組みで常に意識し、中国の文化を継承してきたこと、そしてこれからもずっと継続していくということを喜んでいることの証である。そういった一人一人がいてこそ、ムードが高まる要素となる。中国には、国慶節(「1949年のこの日、中国に中華民国国民政権にかわって、人民解放軍の力で新しく成立したのが中華人民共和国で、この日を記念して設けられた。<sup>(2)</sup>」)のように国際的に広く知られたものの他に重要な伝統祝日があり、建国以前古くから親しまれてきたものがある。また、それらを若者からご年配の方まで皆がきちんと挙って祝う文化がある。そのよう点からも、その自己文化に対するムードの熱さに気づかされよう。これまで継承されてきた伝統的な記念日の主なものを以下に挙げる。

#### 「中国の主な伝統節句」

時期	記念日の名前	説明
旧暦(1月1日)	春節	旧正月の最も賑やかで、重要な日
旧暦(1月15日)	元宵節	スープに白い玉(餡入り)の点心を食す日
旧暦(4月5日又は6日)	清明節	亡くなった先祖を弔う一日
旧暦(5月5日)	端午節	端午の節句
旧暦(8月15日)	中秋節	月を見て月餅をたべる日

短・長期の休暇を含め実際に経験した中国国家の法定休日を基に筆者が作成  
国際労働節(メーデー)は伝統節句ではないので、省略。

このような伝統的な記念日は、国慶節など国家の重要な位置付けの下にあるものを除けば、それに匹敵する程重要視されているものはない。もちろん、西洋文化の影響で入ってきた記念日も、人々、特に若者の間で世界各国さながらの人気ぶりがある。「バレンタインデー」、「万聖節」、「クリスマス・イヴ」などはその典型といえよう。しかし、表面的に見受けられるこのような様相とは対照的に、中国に起源のある伝統的な記念日は決して軽視されていない。人々の心の中に決して忘れられることのない伝統を重んじることの文化が表れている。中国人を対象に「中国の伝統的な記念日が重要か、若しくは西洋から来た記念日が重要か」という質問で行った調査によると、「89.3%が前者を、残りの10.7%が両者を選んだ<sup>(3)</sup>」。若者に関しては、本当は賑やかで西洋向けの雰囲気の方が好きだという本音をもつ人々が多いかもしれないが、中国発祥の記念日は、これまで家族の団欒を祝う機会として大切にされてきた。むしろ、現代に至ってはこれが子どもの親に対する尊敬と感謝の気持ちを忘れることがなくさせる秘薬の役割を果たしているようにも見える。中国思想の基礎を築いた孔子の論語の現代語訳から導き出された考えには、「よろこんで長命を願ひ、細かい気配りをもっていよいよ孝養を厚くして、時間を大事にしなくてはならない<sup>(4)</sup>。」とあることから現代まで着実にその考え方が伝わっているのではないか。このように伝統文化の日には、必ず祝日として帰郷する時間が設けられ、親子水入らずとなる庶民に最も浸透しているものといえよう。

#### 人間関係と食文化

中国では、内陸及び沿海地域の各所で特にまだ発展途上にある内陸地域において、その外部に対して見せる姿が様々である。大抵の地域では、その土地に（中国人側から見た）外国人、若しくは遠方から客人が足を運んできた時に、自宅へ招いて盛大な家庭料理をもてなすか、外の円卓料理の可能な普通クラス以上の場所へ招いてご馳走をするのが常識である。つまり、現地人は家族間・親子間の関係を大事にするだけでなく、自己及び周辺環境を考慮して繋がりの深い友人、若しくは好意を示さんとする相手に対する独自のアプローチをも併せ持っている。食文化に関しては、「ご飯を盛大に奢る」というように至って単純である。好意を示さんとする相手に対して、相手がもう食べられないという程度までご馳走して初めて、お互いに満足できたという一連のプロセスが概念化している。しかし、南北を基準に分けられる文化は、多少の差異が認められる。1843年の開港から流通・外交の拠点であった経済都市である上海においては、人々の経済意識が高さから、外部からの

客に対して奢るといったことは経験上前者ほど多くはない。経済の独立意識がしっかりと個人に定着しているからではないだろうか。とはいっても、両親や友人を大切に敬おうという基本的態度は、地域的差異による程度の違いこそあれ、この食文化からも見て取れる。また、近年の中国人の間では、女性に限らず、男性の多くが自分で料理を作れるのが当たり前という考え方が多くなっている傾向にある。北京オリンピックの行われた 2008 年の読売新聞のオンライン記事を引用させていただくと、「中国人男性が料理を身に付けるのは、家族の為だけでなく、家に来た客人をもてなす社交のためでもある<sup>(5)</sup>」とある。男女共に、このような最近の傾向を見ることでも友人や家族を思いやる風習が強いことが十分に見受けられる。

#### 外部への積極性と問題点

では、広大な面積と莫大な人口を誇る中国大陸から外国へと出向いている中国人たちはどうか。中国人の出国者数について、中国国際放送局が 2007 年に発表した中国外務省の情報によれば、「2020 年になるとその数は一億人に達する見込みである<sup>(6)</sup>」としている。現在、既に中国国内から世界各国へ挑戦心を胸に飛び出そうとしている人の数は、アジア随一の領域にまで達した。これほど、外部への積極性が顕著に浮かび上がっているのであれば、更にそれ相応の異文化理解や異文化交流に対する覚悟と意識を持っている必要がある。ことわざで、「郷に入っては郷に従え」という言葉がある。これはそもそも、中国に端を発するもので、すでに英語はもちろんのこと全世界のあらゆる言語にほぼ同義の訳が存在している。この言葉が意味するものは、「風俗習慣は、それぞれの土地によって違うのだから、そこで楽しく暮らしたければ、その風俗と習慣に従うべきだ。<sup>(7)</sup>」というように、誰でも一度は耳にしたことがあるか、若しくは異境とまでは行かなくても、日常とは離れた空間において教訓として触れたことのある諺である。その文化を理屈なしにまずは受け入れることこそ最も合理的ということである。これはとりもなおさず、わざわざ（中国人にとっての）外国に来てまで自国の生活（言語・文化的側面）を日常化してしまっている負の現状・問題の脱却点となる考え方だといえよう。諺では、「誰でも知っている」「そんな簡単なこと」となるのは百も承知である。しかしうまくいっていないのは紛れも無い事実であるからには、なぜそうになってしまうのかこの言葉と共に考える必要がある。この問題は正しく、彼らにとっての外国であり、異文化である日本の文化及び人と人を取り巻く環境が持つ習慣の根本的問題と彼ら中国人たちの好奇心と相反する現状に対する苦悩と放

棄にも近いその異文化交流の腐敗状況の問題が、実に多くの場面で実際となってしまっていることの裏返しとして見て取れる。「郷に入っては郷に従え」、この諺はアジアで出国人口第一位を誇る中国全体にかけられた一つの命題とも言えるのではないだろうか。

## 2. 日本文化の特質

### 単一民族国家の帰属意識

日本はいわずとも知れた、独特の地形を有した島国であり、そこに住む日本人は単一民族である。漢族を始めとする 56 種類の民族が混在する他民族国家である中国とは対照的なものと言えよう。そして、戦時下での天皇制の時代を中心に考えると、家父長制度的な色彩の濃かったその頃においては、個々の帰属意識は概ね家族にあった。それに加えて、外部から入る新しい文化に関しては、戦後西洋をはじめ、多くの文化を広く取り入れて独特の文化を形成してきたのも事実だ。その過程で排他的意識の強さが助長されてきたことが否定できないのはなぜだろうか。家族への帰属意識が薄れてきたということ抜きに考えたとしても、やはり内外を含めて周囲に対して、特に異文化に対して冷淡さが浮き彫りになっている。自分の家族に対する帰属意識が強かった時代に比べて、よりリベラルな日常を送れるようになったということもいえようが、その意識変化により、「一人発ち」よりも、「縛られる家族からの解放」とった消極的意味合いが強い。その一方で、従来における家族（両親）への尊敬の対象という見方から一変して今まででは考えられなかったような打ち解け過ぎた友達感覚のような親子間関係へと変容するパターンも、実際社会において見受けられる。外国人の中で友達親子のような関係を理解できない人は実際に多い。個人単位で最初の社会である家族、これが歪んでいる、或いは希薄化してきている別の例として、お盆の日にお墓参りをしている若者は少なくなっていることが挙げられる。家族や先祖に対する想いは年々希薄化している現状「“自分は、どちらかといえば、先祖を尊ぶ方だ”が、20年前（1980年）の72%から60%に、じりじり減少している。（<sup>8</sup>）」からもそのことが指摘できる。異文化を考える上で、焦点を自国の意識変化に当てて見る場合、この僅かな統計上の数字の変化を見逃してはいけませんが、現状を他の国と比較することで、より身近な意識的差異が表れていることを確認できよう。

### 外部への適応性

まず、日本において、ある個人が異なる集団のある一部に身を寄せた時に、それが今ま

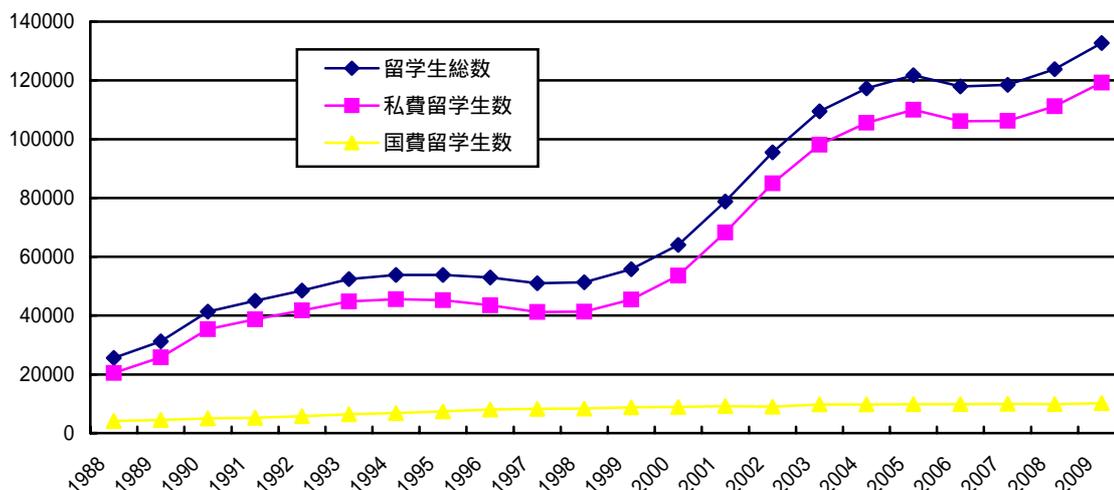
で経験・遭遇したことの無いようなところである場合、どのような反応を示すのかが外部への適応ということになる。その内部の人間に対して、またはその社会の中ですでに形成された暗黙のルールに則って、行動をする。そのときにまず意識されるのは、なるべく厄介を起ささないように、または面倒くさいことにならないように、一定の距離感を保ちながら人間関係を構築する。また、少しでも気に入らなかったら、議論を交わすことをせずに表面的な付き合いに転じるか、リセットしてなるべくお互いが傷つかないように、都合がいいように物事を進めていくといった方式が主だったものである。その他、身内とよそ者といった区別が、周りから、とりわけ外国人の視野から見た場合に顕著だという事実がある。日本人にとっては比較的大多数の人が好印象を持つ西洋人であるが、相手側（西洋人）からみて以下のような見解がある。「西洋人は、日本人が非常に礼儀正しいと考えています。確かに身内の関係の中ではきちんと紹介され、礼儀正しく振舞われますが、よそ者の状況にある場合、形式や丁寧さは完全に無視され、人間の感情を書いた関係となるのです。<sup>(9)</sup>」とあるように、身内とよそ者という概念についての指摘を注視せねばならないのと同時に、礼儀が正しいという日本人の特徴でもある素晴らしい点も述べられている。短所を掘り下げて考えれば、ある意味現代的な情報の多様化がもたらす価値観の多様化や、情報化、そしてその前提にある物資の豊富さ・便利さから来る非文化的な精神の豊かさは内部の文化交流にまで亀裂を生み出しているといえるのではないか。また、否定的な見方のできる一方で、時と場所と場合によって礼儀を正しく振舞うことを幼いころから自然的に身につけ、上下社会の中で敬語を持ち合わせることによって複雑な社会を生きる、肯定的な意味では実に器用な文化としての側面も伺える。この器用という側面は、日本人の態度の他に言語そのものの表現の豊かさがある。例としては、「言葉の綾」とわれるように、外国人からは一見理解しがたい回りくどさをも含めた表現である。「言葉を濁す」、「暗黙のルールに従う」等も同様に挙げられる。一つの意味を非常に巧みに数多くの表し方ができるという多彩性の中にも、非言語の意思疎通をも併せ持つ独特なコミュニティ内でのやり取りや関係を持ちながら、輸入される異文化が複合された社会において、時代ごとに形を変えて日本文化を発展させてきたのである。

### 3. 異文化交流の実際

今の時代、日本人が外国の文化に触れ合う機会は、国内にいくらでもあるといった。外国人の数が増えているとはいえ、お互いにその異文化を理解することの意義や、目標など

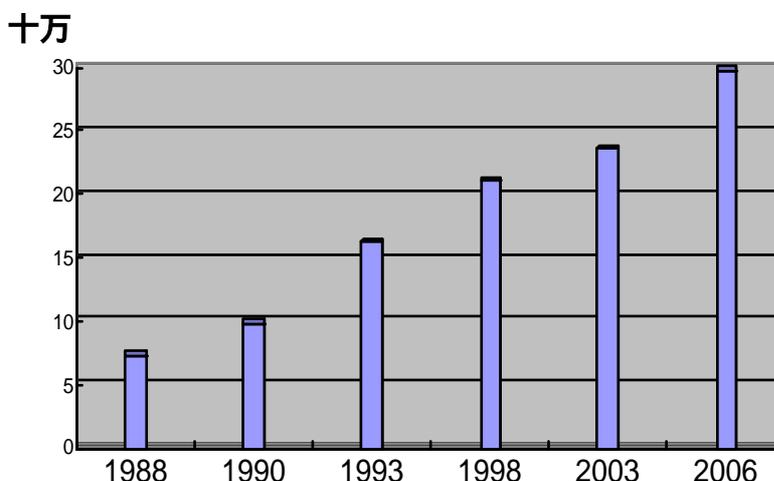
を意識していなければ、ただ身近にいる観光にきた見物人としての外人になりかねない。しかしその意味で、交流を図る場を設けるとすれば、大学での交流が学際的にも環境的にも、最も適した場ではないか。社会へ出た際には、ビジネスにおける利害関係という異文化交流以前の問題がどうしてもレートを占めやすい環境になってしまう。もちろんその社会実際の中で発見できる異文化はあるはずだ。しかし、比較して考えた場合、留学生により広く開かれた場所である大学学内においての実践交流の方がより効率的だといえよう。第一、学びの主体が学生であるから、深い話題を議論することも努力次第によっては可能だ。現在日本には実に多くの外国人が訪れているが、中でも留学生の数は増大している。それに加えて、未だ日本に到達していなくても、何れは日本へ留学に来る事を望んでいると思われる日本語学習者の数も増加している。以下に、[近年の日本における留学生数の推移(1)]と、[海外における日本語学習者数(2)]をそれぞれグラフで表す。

(1) 近年の日本における留学生数の推移



「日本学生支援機構の資料<sup>(10)</sup>」を基に筆者が作成

## (2) 海外における日本語学習者数



「国際交流基金の資料<sup>(10)</sup>」をもとに筆者が作成

かくして、来日留学生が年々増加している現在において、今後われわれ日本及び日本人がどのように変わっていくのかを左右する節目に立たされているのは、全国各地域の大学生が主といえよう。しかし今の段階でそれを受け入れる体制が未だ十分にできていない。外国人が積極的な思いで異国へ飛び出そうとしたときの理想と現実の異文化の壁という現実のギャップが待っているからだ。「どのように接すればよいのか分からない」、「友達はほしいけどどう仕様も無い方法が無い」といったことを留学生の口から多々耳にする。もう諦めてしまっている人が殆どだ。私が中国大陸の内陸部で見てきた異文化に興味を持った取り分け外国語学部で日本語を学ぶ学生たちの姿とは明らかにかけ離れて過ぎている現状である。実際の異文化交流は、双方の意識的接近が数字上の人数の多さという現実に反比例する形で不足している状態なのであって、決して満足ではないのである。

### おわりに

異文化交流というのは、以上みてきたように決して簡単なものではない。日本と中国の2カ国だけで見ても考えなければならない材料は山ほどある。言語・その背景にある文化・流行・歴史などである。その異文化を生ずる前提となる個人による海外留学という重要な要素は、今後の国際社会において価値の高いものとしてさらに進展していくことであろう。とりわけ文化背景への理解を伴った言語は留学生が自国へ帰郷するときに持ち帰らね

ばならない貴重な財産といえよう。また、異文化というのは吸収するだけでなく、自国の文化をも尊重・誇りとして、「相手にとっての異文化」という視点を持ちながら相互的に学習する一形態ともいえ、地球村に課せられた半永久的に必要とされる人間活動とも言えよう。これらを実現手段として、お互いがそれを認識した上での交流、若しくは異文化交流への挑戦（留学を含む）であれば、海外へ行った際に、自国でのバカンス休暇の生活と何も変わらぬ悪い状態には陥らないはずである。その交流は、認識度による傲慢な見せびらかしでも、誇張や軽侮であってもならず、「外からはオープン」に、「内から外へもオープンに」という交流の場を広げていく意識の高まりにつなげられる主体であるべきなのである。こういった個人のアプローチは怠慢化した外部へのあきらめと内部への固執という悪循環の進展・改善へとつながるであろう。現実の社会においては、2010年7月からのビザ発給要件などの緩和による来日人口が増大する時期もあれば、国と国による利益をかけた領有権問題に伴う様々な争いを含んだ諸問題に悩まされる時期までいろいろである。更に、「内から外へ」の現状は、不況という経済の圧迫という理由もさることながら、わざわざ外部へ出て行き挑戦をしようという意思・希望があまり見られなくなっている。日本から外国へ留学を希望する学生が少なくなっている一方で、各国からの外国人はどんどんと日本へやってくる。これを国際社会の先頭をいく土台が日本において築き上げられていくチャンスと捉えることもできよう。諸問題が、国家単位での摩擦である以上どうしても構成員である各国国民に影響してしまうことがある。しかし身近な地域において、最も友好的に、実生活の場を通して対話ができるのは、地域に住む我々一人一人における異文化意識が主流源である。世界中どこの国の人であろうと、皆同じ人間なのだから、「これは良い」「これは悪い」という評価を単独的に留めるだけでは、それまでであり、進展性が無い。「悪いなら悪いなりに」、「良いなら良いなりに」、どのように改善・発展をしていき、また見本とするかを個人単位が協調的態度をもちながら歩み寄っていくことで、海外留学へのチャンスを自国内での交流によっていかに挑戦心を助長するかを真剣に考えられるようになる火種となりうるのではないか。日本に限らず、国際社会の中の異文化理解と発展という意味で、世界の普く国々の一人一人が真剣に考え続けていく必要に迫られているといえよう。

## 図表一覧

- 1、「中国の主な伝統節句」
- 2、「( 1 ) 近年の日本における留学生数の推移」
- 3、「( 2 ) 海外における日本語学習者数」

## 引用文献

本論文を執筆するに当たり、以下の文献・インターネット資料を参考させていただいた。

- 
- (1) 山田忠雄、『新明解国語辞典第六版(机上版)』、三省堂、1995年、9頁
  - (2) 加藤迪男、『記念日の辞典』、東京堂出版、1999年、165頁
  - (3) 路志英、『発展漢語・中級漢語・口語』、上巻、2005年、78頁
  - (4) 渋沢栄一、『孔子 人間どこまで大きくなるか』、三笠書房、1992年、115頁
  - (5) < インターネット資料 >  
<http://www.yomiuri.co.jp/olympic/2008/feature/chinaryu/20080811-OYT8T00502.htm>
  - (6) < インターネット資料 >  
[http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2007&d=0112&f=national\\_0112\\_004.shtml](http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2007&d=0112&f=national_0112_004.shtml)
  - (7) 梶山健、『世界ことわざ辞典 和漢洋対照』、明治書院、1992年、70頁
  - (8) 統計数理研究所国民性調査委員会、『統計的日本人研究の半世紀』、第48巻第1号、2000年、25頁
  - (9) ルースベネディクト(Ruth Fulton Benedict)、『日本人の行動パターン』、日本放送出版協会、2000年、148頁
  - (10) 外務省、『外交青書2010』、第53号、2010年、181~182頁

---

## 要約

現代は、グローバル化によって異文化交流・異文化理解が不可欠となっている。従って個人個人が広い視野に基づいて、必ず遭遇するであろう異文化や既存の文化・及び自己の文化を見つめなおす必要がある。その手段としては、人口数の多い中国を対象に考えることを切り口に、世界の異文化圏との円滑な交流を目指すことである。中国には古い伝統的祝日における国民の様子や食文化から見られる人間関係からも、その家族・友人を大事に思う長所がある。一方、よく見られる現象として、自国にいるときとなんら変わらぬスタイルで、普段を送ってしまっている負の側面も伺える。一方、日本人固有の文化から導き出される、特殊性、と家族離れの問題を、中国との一部比較による身近な例として差異を感じることができる。また、西洋の外国人から見た日本の特徴と差異を今後の課題点として指摘することもできる。実践の場としては、社会はもちろん学生主体の学び舎で、オープンである大学が好ましいと思われる。その点を踏まえて「良い点・悪い点」、つまり「長所・短所」を知るだけでなく、今後の改善・発展に活かせるように、協調・歩み寄りの個人レベルでの意識が非常に大切である。外からの対応も内からの挑戦も、まずはその高い意識を根拠にして、環境として決して難しくない現代において様々なフィールドに身を投じることで海外留学への希望・志がおのずと沸いてくるはずである。

---

## キーワード

- 1、地球村
- 2、異文化交流
- 3、ことわざ
- 4、排他性
- 5、情報化
- 6、礼儀
- 7、家族・友人関係
- 8、異文化フィールド
- 9、同一社会
- 10、既存文化